

「バングラデシュの青い空の下で」

兵庫センター
(兵庫職業能力開発促進センター)

頃末 寛

今年も夏本番を迎えた。この強い日差しの中で、南の海上には入道雲がその存在を誇示し、力強い雲と青い海を眺めていると25年経った今でも、あのバングラデシュの吸い込まれそうな乾季の青い空や猛烈なスクールと肌を刺すような熱風が蘇ってくる。あの異国の地で過ごした青春時代の2年間を今になって懐かしむのは、私がすでに人生の折り返し地点を過ぎたせいだろうか。

海外に憧れていた20代後半頃の私は、サラリーマンとして地道に造船所に勤務していたのだが、日増しに自分の身体の中を得体の知れない熱のようなものがムクムクと湧いてきて、ついには押さえ切れなくなった。この心と身体のバランスが狂うような形容のし難い現状から抜け出したいとしきりに思うようになっていた。しかしながら、その頃の私はすでに結婚していたので、経済的・将来的な面などで妻やその両親に心配をかけたくないという思いも強く、種々考えた末に海外協力に応募することにした。

一方で勤務先の会社では昭和48年のオイルショックの影響下で経費の節減に追われていた時期であり、今日でいうリストラも行われていた。それでも会社としては将来の事業構想として海外拠点を強化する目的もあり、そのために海外要員を育てるという意味もあってか公費で従業員の海外研修が行えると考えたらしく、私の申し出に対し受験許可は簡単に与えられた。

昭和53年秋募集の外務省・国際協力事業団・青年海外協力隊のバングラデシュ溶接指導員派遣試験を受験の後、同年10月1日より東京・広尾で派遣前訓練に入った。

さまざまな動機で協力隊に参加した20～35歳の青年たちであった。ある者は失恋して日本を脱出した。またある者は就職猶予的なモラトリアム派の若

者等、参加動機は多種多様だ。純粋に海外技術協力を考えている者は果たしてこの中に何%いたのだろうかと思うと、私もその前者の1人であったのかもしれない。そういった若者たちであっても公用旅券をもって派遣される以上、赴任国で常軌を逸した行動は許されるわけがなく、ある種の教育と訓練が必要だ。

東京での約1ヵ月間の基礎訓練を終え、新しくできた長野県駒ヶ根市にある語学訓練所へ向かい、ここで約2ヵ月間を過ごした。

発展途上国はおしなべて先進国の植民地であった例が多く、第二次世界大戦後多くの国々が独立した。しかし言語に関しては旧宗主国の影響が根強く残っているもので、少なくともその言語を自在に操れない限り、有力者にはまずなれない。私の赴任するバングラデシュ人民共和国の場合はイギリスの旧植民地なので英語も公用語になっている。この地で過ごせば帰国のときは英語がペラペラになってる筈だ、これは有益な副産物がついてくるぞと内心ニンマリしていたのだが…、やがてそうではないことが次第にわかってきた。

この国は永年イギリスの旧植民地の一部であり、その後言語や宗教の相違が原因でインドから独立、更には1971年に東パキスタンから分離独立、といった複雑な経緯を辿ってきた国で、文化・宗教的にはインドを挟んで西のイスラム圏でもある。この国で友好かつ草の根的に溶接技術を指導するには、英語では難しいと協力隊事務局は判断したのか、われわれはやや不満を覚えながらも、バングラデシュの公用語であるベンガル語の特訓に取り組むことになった。

われわれは昭和54年1月下旬にバングラデシュに向けて羽田を出発し、タイのバンコクで一泊した後、

翌日いよいよバングラデシュに入った。首都ダッカの上空から眺めたバングラデシュの大地は平坦な土地に緑の田んぼが限りなく広がっていた。

広辞苑によるとバングラデシュは「ベンガル人の国という意味で、インド亜大陸の東端にある人民共和国。国土面積は北海道の約1.8倍に1億2,000万人(95年統計)が住み、ガンジス・ブラマプトラの両大河が泥土を運び沖積してできた。宗教はイスラム教徒が85%。文盲率40%」とある。

ダッカ空港に機は予定時刻どおり到着の後、協力隊事務所の駐在員や職員が出迎えにみえていた。ダッカ空港は今から約30年前に日本赤軍によるハイジャック事件で有名になったあのダッカである。われわれは政府間援助のジュニアエキスパートの身分で赴任することから、パスポートは一次公用旅券を支給される。入国審査でイミグレーションオフィサーから入国の目的を聞かれるのだが、そのとき、われわれは堂々と「私たちは政府間援助できた。このとおり日本の公用旅券を所持している」と言っただけのもの、係官曰く「この国に観光で来る人はいなく、ほとんどの人が公用で来ているが、それがどうかしたか？」と反対に質問され、公用旅券の効力を期待した効果もむなしくわれわれはなんとなく意気消沈するも、変に納得もしてしまった。

ダッカ事務所に別送品が到着するのを待って、われわれ新人は夫々の赴任地に立つ前に受け入れ先の各中央省庁にあいさつに行く。私の場合は当時の雇用省職業訓練局に出向き、チョードリー局長にあいさつをするが、英語・ベンガル語を思うように喋れない私を、局長は心配そうに見つめていた。

私の赴任先の職業訓練所はこの国の港湾都市チッタゴンにある。この訓練所(以下TTC)では国連開発計画・国際労働機関支援プロジェクトが始まって1年が経っていた。赴任地にはバス・列車・飛行機で行く方法があるが、私の場合は約300kmと遠方であるという理由で、飛行機運賃が支給された。ダッカ事務所の駐在員に「チケットはどこで買うの？」と尋ねると「自分で探せ！これも現地適応訓練だ」という返事が返ってきた。これは大変な所へ来てしまったと思ったが、それももう仕方ない。地理もろくにわかっていなかったが、Rikswa(人力車)に乗り、右・左・真っ直ぐ・止まれと簡単な単語を連発しな

がら、やっと航空会社のオフィスに辿り着いた。ところが空港事務所ではスタッフの英語が流暢すぎて、言ってることがよく理解できなかったが、ともかく、航空券を手に入れることができた。

何とかダッカを出発してこの国の南に位置するチッタゴンに着く。まずTTCのブイヤン校長へ赴任あいさつに行き、これから2年間の活動方針と私生活について質問を受けた。前述の局長との面接のとおり、自己紹介程度しか会話能力ができない私を校長も不安そうに見つめ、私自身もこれからの生活について、いささか不安な気持ちになった。

住居は校長の計らいで近所の公務員宿舎の3階の1室が与えられ、早速生活に必要な道具を揃えるためにマーケットへ向かった。まずマラリアを防止するために蚊帳を手に入れた。ベッドに4本の支柱を立て上から蚊帳をすっぽり覆う。部屋は電灯1つ、天井ファン、ベッド、机と、いたって殺風景で、映画に出てくる刑務所のような部屋であった。窓には泥棒除けか、日本へ逃げて帰らないようにしているのか、ことさらのように立派な鉄格子が嵌っていた。1人机に向かい足元で燻る中国製のあまり効かない蚊取り線香の弱々しい火を、1人寂しく眺めていると以前に読んだ記事を思い出した。

蚊取り線香を世界で初めて作ったのは日本人である。明治18年、後の榊大日本除虫菊の創始者となった人が、アメリカの知人から送られた除虫菊の種を栽培したのがきっかけだ。米国では除虫菊は蚤取り粉として商品化されているが、偶然にもこぼれた粉を灰皿に戻したものが燃えて、蚊が次々に落ちてきたという。偶然の発見と、伝統的な仏壇線香の製造技術が結びついて、金鳥蚊取りは誕生したと93年の読売新聞に載っていた。

生活が一段落した頃、校長が自分の遠縁に当たる使用人を雇ってくれと言ってきた。この国で働く外国人はバングラデシュ人を雇用する義務が暗黙の了解事項としてあるらしい。15歳のラミアンという男子を雇い、炊事や買い物をさせるのだが、何分にも自分の身の回りの世話を人雇うのは初めての経験であり、初めのうちは疲れることが多かった。食生活は朝食が「ナン」とカレー風マッシュポテト、昼と夜は共にカレー、この生活が700日続くことになった。カレーというのは、実に合理的である。火を通

せば腐りにくく何日も日持ちがするし、発汗作用があって食欲の増進にもつながる。

私生活も落ち着いてTTCに出勤することになった。対象となる訓練生は17~18歳で訓練年限は2年間。始業は8時であるが、私はILOチームに倣って9時からの勤務になった。訓練が始まると途中で昼食休憩はなく14時で終業になり、土曜は半日で金曜日はイスラム教の安息日に当たるので、日曜日は勤務日である。

当面私の担当授業は実技を指導することになった。実習を行って奇異に感じたのは、この国には作業衣の概念がなかったことだ。当時の彼等の服装は大半が布を筒状に縫ったものをスカートのように穿き、腰のところで捻って臍の前で縛るルンギを着用していた。上着はランニングかYシャツ姿で、足元はゴム草履であった。このままの服装で衣服を焦がさないように溶接をするものだから、どうしてもへっぴり腰になる。これでは溶接技量の上達は望めないと考え、校長と交渉して作業服を買う予算を取り付けた。TTCスタッフと古着マーケットに行き作業服を値切って調達するのも私の仕事だった。このマーケットの古着は日本からの災害見舞い物資が中心なのだが、ここではちゃんと商品として売られている。援助物資は本来被災者へ均等に配布されるべきなのだが、このあたりに発展途上国の現状を見た思いがした。余談ながら古着のポケットの中に日本の紙幣がまれに紛れ込んでいて、私の顔を見かけると、現地通貨との交換を迫ってくることもしばしばで驚かされたものだった。

溶接棒は1人1日3本の割当てでそれを使い切れれば実習は終わりとなり、あとは教材のかからないサッカーを行う。どこか昭和30年代の日本に似ていなくもない。途中停電になることもしばしば経験し、いつ復旧するかもわからない電気の供給をじっと待つ。終業まで停電が続くこともあり、訓練は計画どおりには進まなかった。国民性は日本人の目には人懐っこく映るが、内面はしたたかで自己主張が強く、何故か質問好きだ。人のプライバシーにも土足でどんどん踏み込んでくる。これが文化の違いなのかと実感するやら呆れてしまった。身振り手振りを交えて訓練生の話を聞いてみると、彼等がTTCに来る目的は国内に産業が少なく、中東へ出稼ぎに行つて短

期間に稼ぐためのようだ。協力隊の理念からは少し寂しい思いもするが、発展途上国はそれなりの事情がありこれも国際貢献の1つだろう。

身体も精神も慣れてくると周りが見えるようになる。ある休日に世界銀行の協力でできたアジアハイウェイに行ってみた。マンゴーの木陰でミルクティを片手に蠅を追いながら一面緑の田んぼの中を真っ直延びる1本のアスファルトを眺めていると、輸入されたばかりと思われる日本製の自動車がハイウェイの陽炎に揺らぎながら矢のようなスピードで陸送されてゆく。周りの風景といえば見渡す限りの緑の稲田。景色を遮るものは何もなく空は抜けるような青空と地上の接点を、ただ若々しい稲だけがそよいでいる。時折、山羊飼いが群れを追い、荷物を満載した大八車やリキシャがのんびりとハイウェイを横切る。その光景は遠い過去と現代の風景が交錯し、まるでタイムスリップの中に居るようで、私の身体は何とも形容し難い不思議な感覚に包まれていった。時はゆっくりと流れ熱風が頬の毛穴までも熱く、身体がこの風景に溶け込むような気持ちになってくる。ああ自分は今、外国にいるんだな、との体感に至福な時を感じていた。このような貴重な時間は神様が私に与え給うたと酔いしれながらも、あろうことか私の気持ちはこの国から日本を眺めていた。

故国では時間や規則および生産性に縛られながら、会社の一歯車として、狭い会社組織の中で黙々と働く。人と争わないように仮面を被り、当たり障りのない会話をし、やっと生活できるだけの給与を貰い、慎ましく生きる。ただ時間だけがむなしく過ぎていく毎日である。このまま年を取るのかと思うと、人生やひいては日本の社会そのものが非常につまらなく感じていたものだった。しかしながらバングラデシュのゆっくりと流れる時間と牧歌的な環境に身を置いて、じっくり考えてみると、経済の安定した日本の生活のすばらしさや豊かさの恩恵を改めて感じた。われわれはその恩恵にどっぷりとつかっているせいで、そのありがたさを実感できないのかもしれない。この豊かさは国力という国の基礎が根底にあってはじめてなされるものである。その国力は国民が一丸となって戦後の復興に努力したわれわれの父母の賜物である。そして国家という重たい存在もその国力を維持するために必要不可欠であり、

国旗、国歌はそれを象徴すると思われる。それはその国の国民にとって国のシンボルとして誇りと信頼、そして心のよりどころでなくてはならない。

バングラデシュ滞在中にも語学の勉強がてらこの国の映画を何度か観た。上映の始めと終わりには必ず国旗が写され、国歌が流れる。観客は立って礼をし、外国人でも同じことを強いられ、従わない場合は逮捕もあり得る。この国旗・国歌に対してわが国はどのようなだろうかと、ふと思った。日本でも過去の重たい経緯は別にして1つの国旗、国歌のもとにすべての国民が集える日が早く来ることを望みたい。ちなみにバングラデシュの国旗はわが国の日の丸をお手本にして緑の大地に真っ赤な太陽をあしらっている。

さて、この国は海拔数mに立地し、「洪水の大地」と呼ばれている。毎年の如く洪水とサイクロンで多くの死者が出る。その厳しい気候風土の中で暮らすには、生活の戒めとしてイスラム教を受け入れ、戒律を守りその教えが一部道徳となり、または法律化もしている。例えば酒・タバコは厳しい自然の中では適切ではなく、博打や売春は集団を乱す元となり容認できないとされ、断食によって神の恵みに感謝する習慣も必要とされている。

また、洪水によって毎年土地が減少しているともいわれているが、そのような自然の脅威と共存しながらも人口増加は続いている。確かに主食としての米は三期作で自給できるが、他の物資は買う金もなく援助に頼っているのが現実であった。米については次のようなことがあった。マーケットに行くと現地米が等級別に売られており、その最下等に日本の援助米が並べてあった。日本にも事情があって、政府が買い上げた備蓄米は簡単には売却できないので、年々古米となって在庫が増加して困っているのが実状であった。そんな頃、バングラデシュに未曾有の大洪水が発生し、彼等が必要とする米が不足すると、その古米を援助に廻したことが記憶にある。援助という美名の元で送りはしたが、現地での評価は低かったのかもしれない。当時、日本としては米の処分困っていた可能性が高く、国連を通じての援助額達成と古米の処分という一石二鳥を狙ったのではなかったのだろうか。

わが国の工業技術力は品質の高い製品を生みだし、

それを世界の国々が買ってくれて、日本経済が成り立っている。しかし原材料たるや空気以外は多少なりとも発展途上国といわれる世界からの輸入に頼っている。日本の国力、経済力はこのような関係の上で成り立っている。私たちの世代は物が少ない頃から物が溢れる高度成長期にかけて少年期を過ごしてきた。今日のがわが国の経済力は戦後の混乱期から明るい未来を信じ、飢えない社会を懸命に作り上げた世代の努力の結晶がこの繁栄につながっていて、その有難さや尊さは幼なかった当時の私にも身に染みてわかっているのだから、貧しい国から豊かな国を見つめたのかもしれない。

この豊かな生活から脱け出してわずか2年間ではあったが、この国の人々と肌を接し生活を共にしてきた。あたかも物欲を断った一種の仏門に入ったような環境で、贅沢に慣れた私の精神や肉体がどう反応するかを試したい気持ちも多少はあった。先述した動機から思わぬ国に長期体験旅行をしたのだが、われわれが忘れかけたものの多くを貧しくとも明るい、目のキラキラした人々から多くを教わった。この旅行は、外国から日本を見るいい機会であり、新たな発見に気づき人生が味わい深く思える良き経験だった。この体験がなかったら、私は今でも自分自身や日本に対して不平不満を言い続けていたに違いない。異国の地で日本にない現象に感動し、妙に嫌いになれない面を持つ人々と接し、2年間カレーを食べ続けた。1人で何でも交渉して勝ち取ることの大切さを学び、多くの経験と思い出を貰って今この地を離れることができた。飛行機のエンジンが唸り加速する。車輪が離れる。「あっ！今この大地ともお別れだ」早く帰りたい気持ちと、やっと2年間が終わったという思いが複雑に交錯する妙な震えが身体を突き抜ける。嬉しいような、そして寂しい笑いと涙が込み上げてくる。お世話になったいろいろな人たち、受講生の面々の面影が次々と脳裏に現れ滲んでは消えていく。窓からダッカを見下ろした。来たときと同じ光景なのに町も田園風景も懐かしさという輝きに格段に増幅され、景色は滲みやがて段々と後方に小さくなっていった。